

中央大学特定課題研究費 ー研究報告書ー

所属	文学部	身分	教授
氏名	宮間 純一		
NAME	MIYAMA JUNICHI		

中央大学特定課題研究費による研究期間終了に伴い、中央大学学内研究費助成規程第15条に基づき、下記のとおりご報告いたします。

1. 研究課題

天皇裕仁の大喪儀にみる第二次世界大戦の記憶ー日英関係を中心にー

2. 研究期間

2021・2022年度

3. 費目別収支決算表

掲載省略

4. 研究の概要（背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 600字程度、英文 50word程度）

（和文）

本研究は、天皇裕仁（昭和天皇）の大喪儀という儀礼の場に立ち現れた第二次世界大戦の記憶を、主に日本とイギリスの視点から検討するものである。

近代日本における「王」（天皇）の儀礼については、1990年代から天皇の身体の可視化を論点として進められてきた。近世には御所の奥深くにいて<見えない>存在であった天皇が、民衆の前に姿を現し、国民国家統合の象徴として機能するようになってゆく過程が、行幸啓や大礼・婚姻・大喪儀などのページェントを素材として分析されている。特に、大喪儀については1989年の裕仁の葬儀が起爆剤となって、著しく研究が進展したが、近代に形成された大喪儀のありさまがいかに戦後のそれに引き継がれたのか／引き継がれなかったのかを歴史学の視点から分析した研究はほぼない。

裕仁の死後、「昭和」が国内外のメディアで回顧されるが、葬儀の場にきわだって表出するのは第二次大戦の記憶であり、そこには如実に当時の国際関係が現れた。そこで本研究では、日英双方の公文書などを駆使して、裕仁の大喪儀をめぐる日本・イギリス間の戦争記憶の相克を同時代の日英関係と併せて検討し、「象徴天皇制下」において天皇の儀礼がもつ意義を明らかにした。

研究の成果は、シンポジウム「歴史学からみた近現代日本の「公葬」における「<記憶の場>としての天皇裕仁の大喪 — 「戦争責任論」を手がかりに—」で公表した他、今後論文として活字化する予定である。

（英文）

This study analyzes the "state funeral" of His Majesty the Emperor (Emperor Showa). In particular, I examined the memories of World War II that emerged in the media reporting the funeral. Analysis of Japanese and English newspapers and public records revealed that Hirohito's death brought to the surface conflicting memories about the war.